

編集付記

1. 本書は、財団法人国際宗教研究所主催の公開シンポジウム「現代における宗教者の育成」(2004年11月13日、大正大学巣鴨校舎1号館)に基づいて再構成したものである。
2. 構成の詳細は弓山による「序」を、参加者・執筆者については巻末の「執筆者紹介」を参照されたい。
3. 第I部(発題およびコメント／ディスカッション)は、参加者の校閲を経ている。発題は主旨が変わらない範囲での加筆訂正を含み、コメント／ディスカッションは省略した部分がある。
4. 第II～III部は、シンポジウムとは別に書き下ろされた。

序

——なぜ「宗教者の育成」なのか——

弓山達也

課題としての「宗教者の育成」

1990年代、とりわけ1995年のオウム真理教の地下鉄サリン事件以降、宗教に対する無関心が急速に拡がっていった。2003年1月に発表された朝日新聞社の世論調査では、「宗教に関心がある」と「多少関心がある」をあわせても23%であり、残る77パーセントは「関心がない」と答えている。2005年9月発表の読売新聞社の世論調査でも、この傾向は同様で、「宗教は大切であると思うか」という問いに対して、「大切」35%に対し、「そうは思わない」60%であった。その中であって、宗教者の役割とはいったい何であろうか。教育や地域や医療の現場で、例えば宗教教育の担い手として、地域のご意見番として、ホスピスにおけるスピリチュアルケア・ワーカーとして、宗教者の役割を期待する声はあるものの、実際の現場で宗教者の姿を見ることは稀である。宗教者は現代人にとってどのような意味があるのだろうか。

宗教に対する無関心が広がる一方、宗教者の不祥事や行状が面白おかしく報道される傾向は弱まることはなく、宗教者の質はかつてないほどに厳しく問われている。しかしながら新規リクルートにおいても、家族内継承においても、教団運営の世代交代においても、次世代の信仰の担い手の質的向上について完璧なマニュアルというものは教団内に存在しない。

少子高齢化の波に社会全体がさらされる現在、教団のみがそれに無関係ではいられず、教団の担い手の高齢化や信仰の次世代継承の不十分さが懸念されている。日本の教団の多くは世襲化によって、次世代への継承を成し遂げてきたが、価値観の変化により、今まで当たり前に行なわれてきた世襲が、若い当事者に当然のこととみなされなくなってきた。むしろ世襲化は、組織の硬直化と

運動の弱体化をもたらすものとして、あるいは「私物化」や「親の七光り」と結びつけられてネガティブに語られる向きすらある。かかる風潮において、後継者と目されている彼／彼女らが、すすんで宗教者の道を歩むことに躊躇いを覚えることは想像に難くない。

宗教者の質を一定のレベルで持続させることは、その教団の要^{かなめ}であろう。信仰を次世代に伝え、これをどう高めていくかは、教団の最も深刻な課題の一つであるといっても過言ではない。換言すれば、これは、宗教者の担うべき質、つまり宗教性や霊性（スピリチュアリティ）そのものを問う、抜き差しならない問題でもある。

さらに、この問題は宗教者の家庭内の教育や宗教系大学の教育課程の問題とも密接に結びついている。また、教団には、さまざまな課題に応える特化された教師を養成する機関やプログラムがある。海外布教師、平和活動等に従事するリーダー、医療や看護の分野におけるケア・ワーカーなどの養成も、広い意味で「宗教者の育成」に含めることが可能であり、そう考えると、問題のすそ野は実に広い。そして、多くの教団で、教育制度や資格取得に関する改革が重ねられている。

本書は、現代における宗教者の育成についての現状、課題、現場からの声をレポートするものである。しかしながら、世間一般には、こうした教団や宗教者の奮闘努力は、ほとんど知られることはないだろう。教団や宗教界の閉鎖的な体質もあるが、日本の社会の宗教への無関心や「腫れ物に触る」ような雰囲気、その背景にあるとみていい。宗教や信仰することが、人間にとって極めて重要なことであるにもかかわらず、宗教セクターと非宗教セクターとの垣根は高く、その間の意識のズレは大きい。また宗教界でも教団の宗教者育成のプログラムの実施状況や課題は、あまり情報共有されることはない。その意味で本書は、一般市民にとっても宗教者にとっても、具体的な情報共有の貴重な一助となるに違いない。

公開シンポジウム「現代における宗教者の育成」

本書は2004年11月13日に東京にある大正大学で開催された、財団法人国際宗教研究所主催の公開シンポジウム「現代における宗教者の育成」における

発題と議論の記録を中心に、当日の参加者やシンポジウムの趣旨に心寄せる執筆陣を得て編集されたものである。「宗教者の育成」とは、上述の通り、かなり議論の幅があらう。信仰深い家ならば子ども教育は、すなわち宗教者の育成であり、宗教立の学校でも児童・生徒・学生の教育には宗教者の育成の側面があるかもしれない。信者が布教者の役割を担う新宗教にあつては、信者のリクルート自体が宗教者の育成ということにもなる。ただ、本書前半のシンポジウムの記録（第I部）では、現代における宗教者をめぐる諸課題を、主に次世代の信仰の中心的な担い手（神職、僧侶、神父・牧師、教師、布教師など）の育成に絞って議論するものであった。この点は第II部と第III部も、基本的な議論の範囲は同じである。

シンポジウムのパネリストは、戒能信生氏（日本基督教団農村伝道神学校講師）、塩入法道氏（大正大学助教授）、松本丘氏（神社本庁教学研究部所長）、安井幹夫氏（天理教校研究所研究員）であった（所属などは当時のもの）。パネリストからは、各教団における教師の育成のシステム、教師数の推移と現状、教師育成の上での特筆すべき事例や抱えている課題の話があった。

戒能氏からは、日本基督教団の教職制度についての概説があり、神学大学や神学校を経ない教師養成コースの存在、神学校進学者における新卒者の減少と中高年の増加、謝儀（給与）についての諸問題に対する報告があった。

塩入氏は、寺院子弟が天台宗僧侶となる基本パターンを示し、その上で主に宗門大学を念頭においた諸問題（人格陶冶、信仰心、学力、家庭教育、一般学生からの乖離）について報告された。

松本氏は神職数の推移を示し、全神職数の微増と宮司数の減少をとらえ、地方神社における兼務神社の増加と都市部の神職数の増加を示唆した。

安井氏は天理教校第二専修科（高校を含め8カ年一貫教育）の立ち上げの経験から、この数十年を振り返り、生徒ならびに生徒の親子関係の変化を指摘した。

シンポジウムのコメンテーターは、井上治代氏（ノンフィクション作家）と対馬路人氏（関西学院大学教授）にお願いした（所属などは当時のもの）。井上氏から（1）大学教育（至上主義）の限界、（2）世襲制とモチベーション、（3）宗教性やスピリチュアリティを育む問題、（4）宗教団体の企画力や社会性、（5）女性教師の増加に関する質問とコメントがあった。

対馬氏からは(1)プログラムの具体例を示してほしいとの要望のうえ、井上氏と同様に、(2)女性や幅広い層、さらに(3)外部を巻き込む戦略に関する質問が続いた。

ここに至って、パネリストはやや内情に関する議論を展開することとなり、特に宗教者としてのモチベーションアップや、スピリチュアリティの開発・深化に関する具体的な状況が話されることとなった。成能氏はかつて寮制度が果たした役割が今では機能しづらくなった現状について述べ、松本氏は社家でない自身の経験から、神社実習について、また神職の生涯学習について話をした。安井氏は、第二専修科の具体的なプログラムを1年ごとに説明し、どのように「魂に徳をつけるのか」を説明。一方、塩入氏は子弟が嫌々仏門に入りつつも「あきらめる」ことと、そうすることによりモチベーションは後からついてくることを述べた。

フロアーからの質問は、社会のニーズをとらえ、社会性を育む教団戦略を問うものと、スピリチュアリティめぐる求道型の宗教性に関するものに大別されようか。特に前者に関しては、発題の中で、取り込むべき女性層を「予備軍」と称する認識自体が、実際の女性教師の活動に鑑み、いかなるものかとの苦言も呈せられた。

こうしたやりとりを経て、各パネリストの前半の貴重な資料やサーベいを盛り込んだ発題とあいまって、具体的な内部事情が見えてきたという印象を参加者は共有したことであろう。また当初、当該問題に関しては世襲化の問題が焦点化される予測を筆者は持っていたが、むしろ、世襲化を前提として、それをどうプラスに機能させるかという議論がなされたと思う。またモチベーションや求道型の宗教性に関しては、自分探しが先行して、拠点運営がおろそかになったり、燃え尽きてしまったりと、単にそれを高めることの失敗例がパネリストから事例報告され、むしろこれをどうコントロールしつつ高めていくかという模索が語られた。さらに、社会(世俗)や地域との接点や宗教受容層のニーズの把握抜きには宗教者の育成は語れないとの了解も得られたであろう。

宗教者育成の現状・課題・現場から

本書第Ⅱ部は、浄土宗、神社本庁、立正佼成会において、宗教者育成に関

わりを持つ3名の執筆者の論考を収めている。

安達俊英氏は浄土宗を設立母胎とする佛教大学における僧侶養成を論じている。そこでは正規課程のカリキュラムだけでなく、通信教育部、別科、そして大学とは別に設置されている浄土宗宗務庁主催の養成講座が紹介され、そこでの問題点が指摘されている。

藤本頼生氏は、近年の福祉や街づくりに関する動きに対して、地域住民の核の一つとして公共的性格を帯びてきた神社とそこに携わる神職の活動を述べ、そこに社会参加・社会貢献と神職養成の可能性を見ようとしている。

篠崎友伸氏は立正佼成会の教師・リーダー養成機関である学林の歴史と教団内で担ってきた役割とその課題を、主に教師養成の本科生を事例に紹介している。

藤本氏の論文は地域力の担い手としての神職の役割に注目したもので、コミュニティの時代といわれる今世紀における宗教者育成の一つの指針を示すものと見てよいだろう。安達氏と篠崎氏の論考には、宗教者育成における理論と実践の兼ね合い、有資格者のフォローアップ、育成される側の資質の問題など、宗教者育成において広く共有されるべき課題が提起されている。

第Ⅱ部が育成する側からの視点に重点を置いているのに対して、第Ⅲ部の本山一博氏と高丘捷佑氏は、むしろ自らが育成される側であったことを思い起こしながら筆を進めている。

本山氏は、第Ⅰ部のシンポジウムでたびたび話題になったモチベーションやスピリチュアリティをどうコントロールするのかという議論を引き受ける形で、自身の瞑想実践・実験を語っている。

高丘氏は自らの僧侶となる、決して順風満帆とはいえない過程をおいながら、自分の前に立ちはだかった幾重もの障害について述べている。はからずも二人とも「開かれた」ということがキーワードになっていると考えられる。

最後に拙稿を掲載することとした。拙稿では、2つのスピリチュアルケア・ワーカー養成をとりあげ、そこには教団を活性化し、宗教者の宗教性を育む宗教の根幹的な性格が認められることを示唆した。筆者の立場は「あとがき」の通り、基本的には育成される側でも、する側でもない。しかし拙稿はカリキュラムや制度よりも当事者やそこで育まれるスピリチュアリティにより関心を払っているという点から、第Ⅲ部に配置することとした。

「宗教者の育成」に関する開かれた議論を

宗教者の育成は、教団の根本に位置する緊急の課題であり、多くの教団で、その担当部署を設置している。しかし、本書編集の際の執筆者とのやりとりや第1部のシンポジウム終了後の懇親会では「どこまで話していいのかわからなかった」という声をたびたび聞いた。そこからも、この課題が広く宗教界で議論され、共有されているとはいえないことがうかがえる。

本書は、現代において宗教者の育成がどのように行なわれ、そこでの課題を教団・宗派を超えて議論することを目指すものである。前述の通り、教団の置かれている位置は社会的に厳しい状況にある。だが宗教は人類文化の中心にあって価値観の源泉となってきた。世界に目をやれば多くの国や地域で、現在も宗教はその役割を担っている。宗教に対する無関心が広がるわが国にあっても、その文化や人々の精神性は宗教とつながり、例えば死生観や他界観や靈魂観を抜きにして、わが国の文化や精神性を語ることはできない。教団や宗教者は、それを蓄え伝える核であり、媒介者であるともいえる。今、心や教育に関して現代人は強い関心を持っているが、そこで宗教について言及することはタブーであり、宗教者自身も専門家を前に口を噤んでしまった感すらある。しかし、心や教育の問題は、本来、宗教が得意とする分野であり、そこには傾聴すべき知恵がたんたんとたたえられているはずである。

このような観点に立てば、次世代の信仰の担い手の育成について思いを凝らし、問題を共有することは、社会的にも大いに意義あるものと考えられる。宗教者の質の向上を抜きにして、社会的資源としての宗教が認められることはありえないし、社会的資源としての宗教がその力を発揮することは、豊かな社会を実現するうえで極めて重要なファクターになるに違いない。その意味で、宗教者の質の向上を目指し、その育成を議論することは、社会全体の質をうらなう重要な問いかけを含むものとなるであろう。社会における教団や宗教者の役割・可能性を信じ、心寄せる方々との議論に向けて、本書を世におくりたい。

第Ⅰ部

シンポジウム「現代における宗教者の育成」